

English Garden 第21話

"Hickory Dickory Dock" Mother Goose

「ヒッコリー・ロードの殺人」 アガサ・クリスティー

前回に続き、マザー・ゲースをタイトルに使った Agatha Christie のミステリーです。物語はヒッコリー・ロード26番地にある、さまざまな国籍の学生が住む寮で進展します。この建物はもと2軒の家だったものをつなぎ合わせたもので、一階部分は共同の居間や食堂になっていますが、階上は離れていてそれぞれ階段がついており、居室は女子と男子に分かれています。

名探偵ポアロの秘書ミス・レモンの姉のハバード未亡人(この名前も犬の世話をする "Old Mother Hubbard" の唄からとったもの)はその寮母をしています。ところがその寮で最近奇妙な盗難事件が相次いで起こり、相談を受けたミス・レモンはそれが気になって珍しくタイプのミスをいくつも犯し、ポアロを驚かせます。そこでポアロはミセス・ハバードを招いて話を聞き、風変わりな盗難品に興味を持って事件の解明に乗り出しました。盗まれたのは夜会用の靴の片方、腕輪、電球、コンパクト、聴診器、絹のスカーフにリュックサック(この二つはずたずたに切られて発見された)などでした。

事件はやがて殺人に発展し、パスポートの偽造や密輸、麻薬といった事件がからみ、そこに寮生同士の恋愛問題も加わって連続殺人事件となっていきます。



ついに事件が解決して、ポアロはオフィスでミス・レモンの打ったノームスの書類を満足げに眺めていると、時計が1時を打ちました。すかさず彼はこう口ずさみました。

The clock struck one,	時計が1時を打つと、
The mouse ran down,	ネズミが駆けおりた、
Hickory, dickory, dock.	ヒッコリー、ディッコリー、ドック。

クリスティーの作品にはこのほかにも マザー・ゲースの唄を題名にしたものがたくさんあり、独特の雰囲気を与えるのに役立っています。"Crooked House" (「ねじれた家」)は次のような唄が下敷きになっています。

There was a crooked man and he went a crooked mile...
He had a crooked cat which caught a crooked mouse
And they all lived together in a little crooked house.
ねじれた男がいて、ねじれた道を歩いていった...
ねじれたネズミをつかまえるネコを飼っていて、
みんな一緒に小さなねじれた家に住んでいた

ねじれた心の人が住む家はねじれています。ねじれた心を持った主人が莫大な財産を残して不可解な死を遂げると次の殺人が起き、意外な結末を迎えるのです。

最近日本でも「マザー・ゲース・コンサート」などが大々的に開かれたりして、テレビでも放映されるようになったのは、たいへん喜ばしいことと思います。